

---

# **俺の彼女は殺人犯**

桂 ヒナギク

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

俺の彼女は殺人犯

### 【NZコード】

N5973C

### 【作者名】

桂 ヒナギク

### 【あらすじ】

俺は今日、殺人犯の恋人に為つた・・・。

(前書き)

人は誰かを愛すると守りたく為る。例えそれが、殺人犯であつても。  
・・。

俺の名は須藤 総一。都内の高校に通う探偵だ。否・・・高校生探偵だった。

その俺が通っていた高校で先程、殺人事件が起きた。

現場は、4階の調理実習室。被害者はクラスメイトの神谷 卓。死亡推定時刻は昨日の午後5時前後。死因は果物ナイフに因る刺殺。心臓を一突きされている事から見てほぼ即死。

生前の神谷は、クラスのマドンナで俺の彼女でもある須藤 綾香の事が好きで、殆ど毎日の様に付き纏っていた。しかし、綾香の方はそれが嫌なのか、何時も彼を避けていた。一応言つとくが、俺と綾香に血縁関係は無い。偶々同姓なだけだ。

その綾香が放課後、窓際にある俺の席にやって来た。

「ねえ、総一」と、綾香が俺に声を掛ける。

「何だ?」

俺は綾香の顔を見て答えた。

「総一さ、毎休みの間ずっと動き回ってたけど、どの辺まで掴んでるの?」「掴んでるって何の話?」

「神谷だよ」

俺は回答に困った。

「ねえ、もしかして私の事疑ってるんじゃないでしょうね?確かに私はあいつの事嫌いだつたし、いなくなつて清々してるけど、殺してなんかいないんだからね」

「解つてるつて。それにお前のアリバイは俺が証明したし」

そう、綾香にはアリバイがある。昨日、神谷が殺された時、綾香は俺と一緒にいた。間違ひ無い。だが、この時の俺はまだ知る由も無かった。巧妙なトリックで離れた場所にいても殺害出来る方法を。

「なあ、綾香。 そう言えば第一発見者って、お前だったよな？」

「そりだけど、何で？」

「いや、そん時さ、変わった事とか無かつた？ 何でも良いんだ、気

になる事」

「うーん、別に無かつたけど？」

「そりか。 ジヤ、帰ろうか？」

その言葉に綾香は頷いた。

俺は徐に立ち上がり、

「あ、そうだ」

綾香は疑問符を浮かべた。

「帰る前に家庭科室見に行つてくるよ。 一度、現場を見とかないと・

俺はそう言つて鞄を持って教室を出た。

「待つて、私も行く」

と、綾香が続く。

俺と綾香は一つ上の階に上がり、家庭科室に入った。

室内には、まだ警察が数人程いた。

「ご苦労様です」

俺がそう警官に向つて、警官は敬礼をした。

「あの、警部は？」

「警部殿は今、職員室で先生方の話しを聞いています。 ご用なら私がお受けします」

「解りました。 ジヤ、一つか三つ聞きます。 被害者の司法解剖の結果は出でます？」

「はい、出でます。 先程警部から、総一くんが来たら渡す様承っていますのでお渡し致します」

警官はそう言つて、解剖記録の「ペーパー」を出した。

俺は徐に受け取り、それに目を通した。 そこには遺体から麻酔が検出された事が書いてあった。

( 麻酔？ 神谷は眠っている間に殺されたのか )

俺がそんな事を考えていると、一人の若い刑事がやつて來た。

「よつ、総一くん」

「あつ、岡さん」

岡山 智、警視庁捜査一課警部。通称、岡さん。

「丁度良かつた。岡さん、麻酔が検出されたつて本当?」

「司法解剖は嘘吐かないぞ?それより、遺体の歯にこんな物が挟まつてたんだが・・・」

岡さんはそう言つて、ポケットから紙を取り出した。取り出したそれは、一枚の写真で、細い糸の様な物が写っていた。  
「科捜研が言うには、被害者が紐か何かを噛んでいたのでは無いかと言つ事なんだが・・・」

(紐?)

刹那、綾香が青い顔をして爪を噛んだ。

「綾香?」

綾香はハツとして、慌てて爪を口から離した。  
不審に思った俺は、綾香に聞いた。

「今日の綾香、朝から何か変だぞ?何か遭ったのか?」

綾香は首を振つた。勿論、横にだ。

「そうか?俺にはそうは見えないが・・・まあ、何か有つたら相談してくれ」

綾香は頷いて、

「解つた・・・」

と、答えた。

(それはそうと、神谷は何でそんな物を・・・?)

俺は床に貼られたテープの上に横に為つた。真上には丁度蛍光灯がある。

(何だあれ?)

俺は素早く立ち上がり、机に乗つて蛍光灯を確認した。

(成る程、そう言つ事か。確かに、このトリックなら誰にでも犯行は可能だ・・・しかし、本当にそうなのか?)

俺は目を動かし、綾香を見た。

「総一、どうかしたの？」

「えつ・・・・? あ、否、何でも無い。それより、一寸屋上に来てくれないか?」

俺はそつ言つて、綾香と共に屋上へ向かつた。

「総一、屋上に何かあるの?」

「お前に聞きたい事があるんだ」

「聞きたい事? 何でも言つて? 答えてあげるわ

「そうか。じゃあ聞くぞ?」

綾香は頷いた。

「お前の所に昨日の夜、警察が来たよな。で、重要参考人として警察に行き、取り調べを受けた。そして、アリバイを証明する為に俺を呼んだ。間違い無いな?」

「うん。でも何でそんな事?」

「実はな、犯人の使つたトリックが解つたんだ」

「へえ、そうなんだ。それで? 犯人は解つたの?」

俺は一寸間を起き、ああ、と答えた。

「じゃあ聞かせてくれない? その犯人と言つのを」

「あんただよ」

「へつ?」

綾香は疑問符を浮かべた。

「あんたが神谷を殺したんだ」

「ち、一寸待つて。神谷が殺された時、私は総一と一緒にいたんだよ? 私にどうやつて殺す事が出来たの?」

「言つただろ? トリックだつて」

「トリック・・・?」

綾香は首を傾げた。

「ああ。しかもそれを使えば、現場からどんなに離れていても自動的に被害者を殺害出来る」

「で、そのトリックってのは?」

「人間時限装置だ。放つておけば被害者が勝手に逝く」

綾香は疑問符を浮かべた。

「使う物は麻酔と紐に果物ナイフ、そして被害者を縛る為のロープだ」

「それでどうやってやるの？」

「簡単な事だ。神谷を予め現場で氣絶させ、ロープで彼の両足、両腕を動かせない様に縛り、仰向けに寝かせておくんだ。そして、紐の先端片方をナイフに結び付け、もう片方を蛍光灯に引っ掛けて彼の口まで降ろし、彼が起きるのを待つ。その後・・・」

「と、ここまで来て綾香が遮る様に言う。

「それをやつてる間に誰かが来たらどうするの？」

「鍵を掛けたければ良い。で、その後、目を覚ました彼に量を調節した麻酔を射ち、紐を銜えさせる。これでトリックは完成。後は彼に麻酔が効いて来るのを待つだけだ」

「大正解」

と、綾香は微笑む。

「動機は何だ？」

「・・・従妹よ」

「従妹？」

「うん。まあ、その事は後で話すから、これから話す事を聞いて」

綾香はそう言って、事件の真相を語り始めた。

時刻は昨日の午後4：00頃に遡り 綾香は現場と成った家庭科室にいた。そこには、手足をロープで縛られ横たわった神谷もいる。

「す、須藤さん、これは一体・・・？」

神谷は、目の前で紐を持つている綾香に訊ねた。

綾香は微笑し、こう言った。

「フフン、あんたは殺されるの。この私に」

「えつ・・・？一寸待って。君に殺される、って俺君に何かした？」

綾香は首を横に振った。

「神谷はもしてないよ。”私”にはね」

「ど、どう言う事？」

「私にはね、従妹がいたの。須藤 綾子、覚えてるでしょ？中学の時、あんたと同じクラスだった・・・」

そう言うと、綾香の目から涙が溢れ出て来た。

「ああ、あの娘？ そう言えば最近、顔見て無いな」

その時、綾香の中で何かがブチッと音を立てて切れた。

「あんた何も知らないの！？」

「えっ？」

「綾子はね、自殺したのよ！ 中学の卒業式の日に！」

「な、何で？」

「あんたの所為よ！ あんたが、あんたが綾子を振ったから！」

そう言つて綾香は携帯を出し、メールの受信箱の一一番下にあるメールを開いて見せた。

「これがその時あの娘から貰つた最後の遺書よ！」  
そこには、こう書かれていた。

『今日、大好きな男の子に告白しました。けど、キモイの一言で振られました。これから先、好きな人が出来てもキモイの一言で振られるのかな・・・。こんな私、生きていの価値なんて無いよね・・・。今度生まれて来る時は、キレイで素敵な女性が良いな。それじゃあ、さよなら』

「このメールを受信した直後、綾子は学校の屋上から飛び降りて死んだわ！ あんたの所為よ！？ あんたが綾子を自殺に追い込んだのよ！？」

と、物凄い剣幕で神谷を睨む綾香。

「一寸待て！ 何でそれで自殺すんだよ！？ て言つかそんなの俺には関係無えし！ つうか何でそれで俺が殺されなきやいけねえんだ！？」

だが、綾香は無視し、徐にポケットから麻酔入りの注射器を取り出した。

「なつ、何だよソレ！？」

神谷は怯えた。

「ウッセーな。ただの注射器で男が怯えてんじゃねえよ」

綾香はそう言つて紐を口に銜え、注射器のキャップを外して神谷の腕に麻酔を射つた。そして、注射器にキヤップをしてポケットにしまい、紐を口から手に移した。

「今あんたに麻酔を注射したわ。少しでも長く生きていなければ、この紐を銜えておく事ね」

綾香は神谷に紐を銜えさせた。

「じゃ、私は帰るから。誰かがやつて来るのを願う事ね」

綾香はそう言い残し、去つて行つた。

そして時刻は戻つて現在 僕は屋上に倒れていた。腹には神谷を殺害した時に使われた物と全く同じ果物ナイフが刺さつている。綾香が隠し持つっていたそれで刺したのだ。

「あ、綾香・・・な、何故・・・俺を？」

「決まつてるでしょ？口封じよ」

「お前な・・・こんな事して・・・済むと思ってるのか・・・？」

「あら、こんな時に私の心配？でも大丈夫、ちゃんと計画してあるから」

そう言つて俺に両手を見せる綾香。その両手には黒い革の手袋が填めてある。

「成る程な・・・それを填めている御陰でナイフには指紋が付いていない、つまり犯人の手懸かりが無い。けど、俺がダイイングメツセージを残したらどうだ？」

「残さないわよ、総一は」

「何故そう思う？」

「それは総一自身がよく知つてゐんじゃなくて？」

「俺自身が知つている、か・・・」

綾香は笑顔で頷いた。

「なあ、綾香」

「ん？」

「俺の頼み、聞いてくれないか？」

「頼み？」

「ああ」

「何？」

「何処か遠くへ行こう、一緒に」

「はあ？ 何言つてんの總一？ あんたは死ぬんだよ？」

俺は腹から包丁を抜き、服の下から分厚い本を取り出した。

「死なねえよバーク」

「なつ、何でそんなのが入つてるのよ！？」

「予想してたからだ。お前が口封じに俺を殺そうとする事」「ふうん・・・良かつたわね、胸じゃなくて。それより、一緒に遠くへつて言つたけど、それはつまり、私の事口外しないって事だよね？」

「当然だろ。牢に幽閉されたお前の姿なんて見たく無えし」

俺はそう言つて立ち上がり、ナイフと本を捨てて綾香を抱き締めた。

「逃げよう、一緒に」

「そ、總一・・・」

この日、俺は高校生探偵から殺人犯の恋人に為つた。そして至急、彼女と共に都内を離れ、逃亡生活を開始する。

(後書き)

感想・評価・突っ込み・その他何でも受け付けますが、当方が激怒する様なコメントはお断りです。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5973c/>

俺の彼女は殺人犯

2010年10月8日15時36分発行